

令和7（2025）年度 学生生活実態調査結果

表中の略称について
NS：看護学科
CW：医療介護福祉学科

I. 調査時期、対象者数

1. 実施期間：令和8年1月～3月（WebClassでのアンケート）

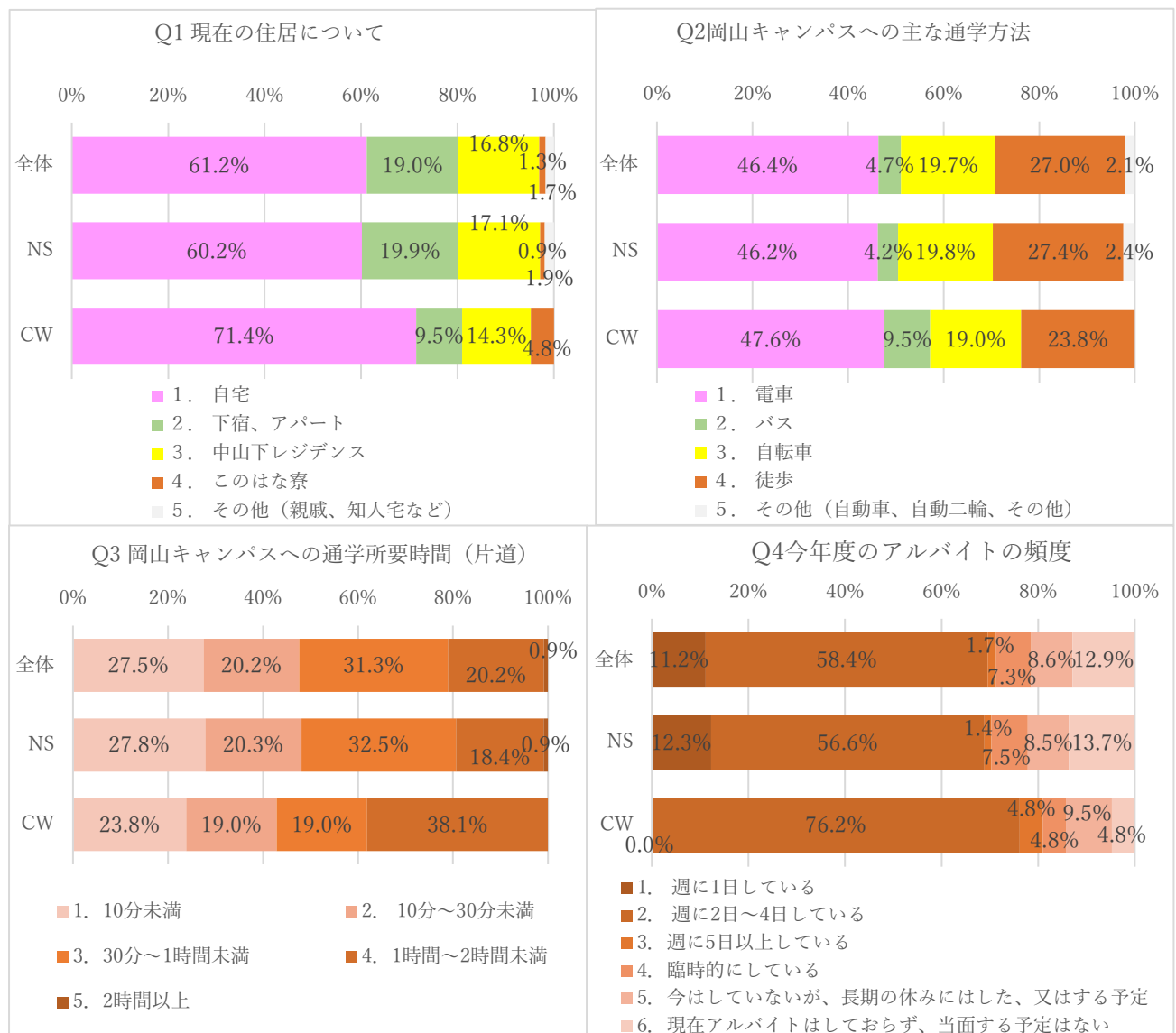
2. 対象者数・回答者数及び回答率

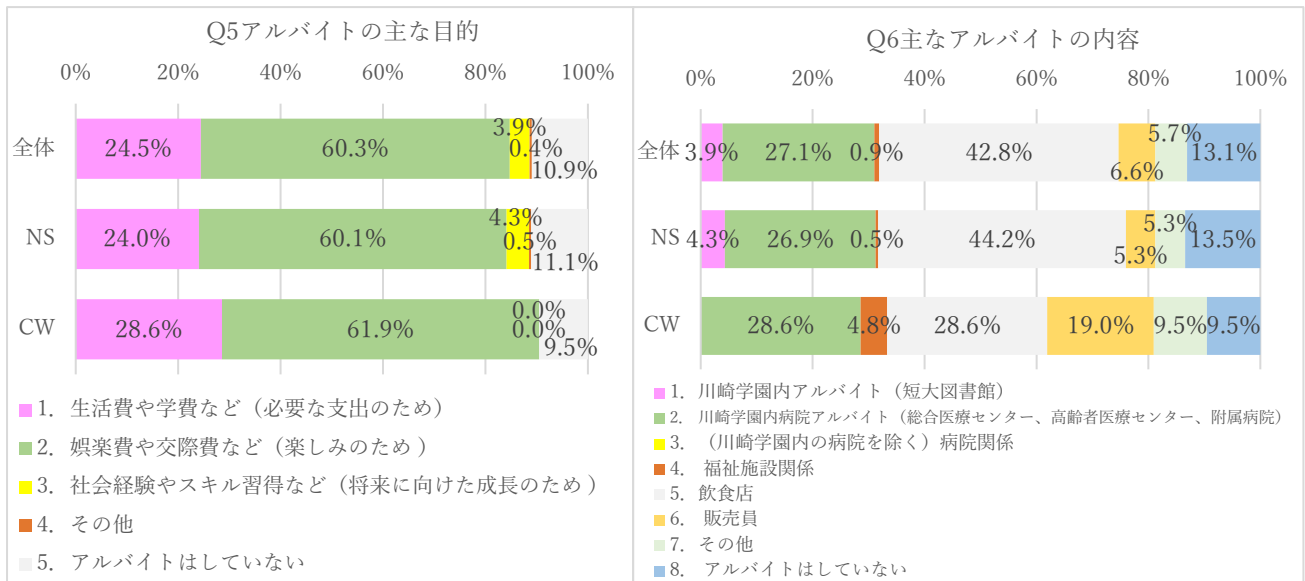
対象者：令和7年度在学学生（休学者を除く令和8年1月1日に在学している者）

	看護学科				医療介護福祉学科				合計
	1年次生	2年次生	3年次生	学科計	1年次生	2年次生	3年次生	学科計	
対象者数：人	79	85	92	256	4	7	10	21	277
回答者数：人	75	78	59	212	4	7	10	21	233
回答率：％	94.9	91.8	64.1	82.8	100	100	100	100	84.1

II. アンケート結果

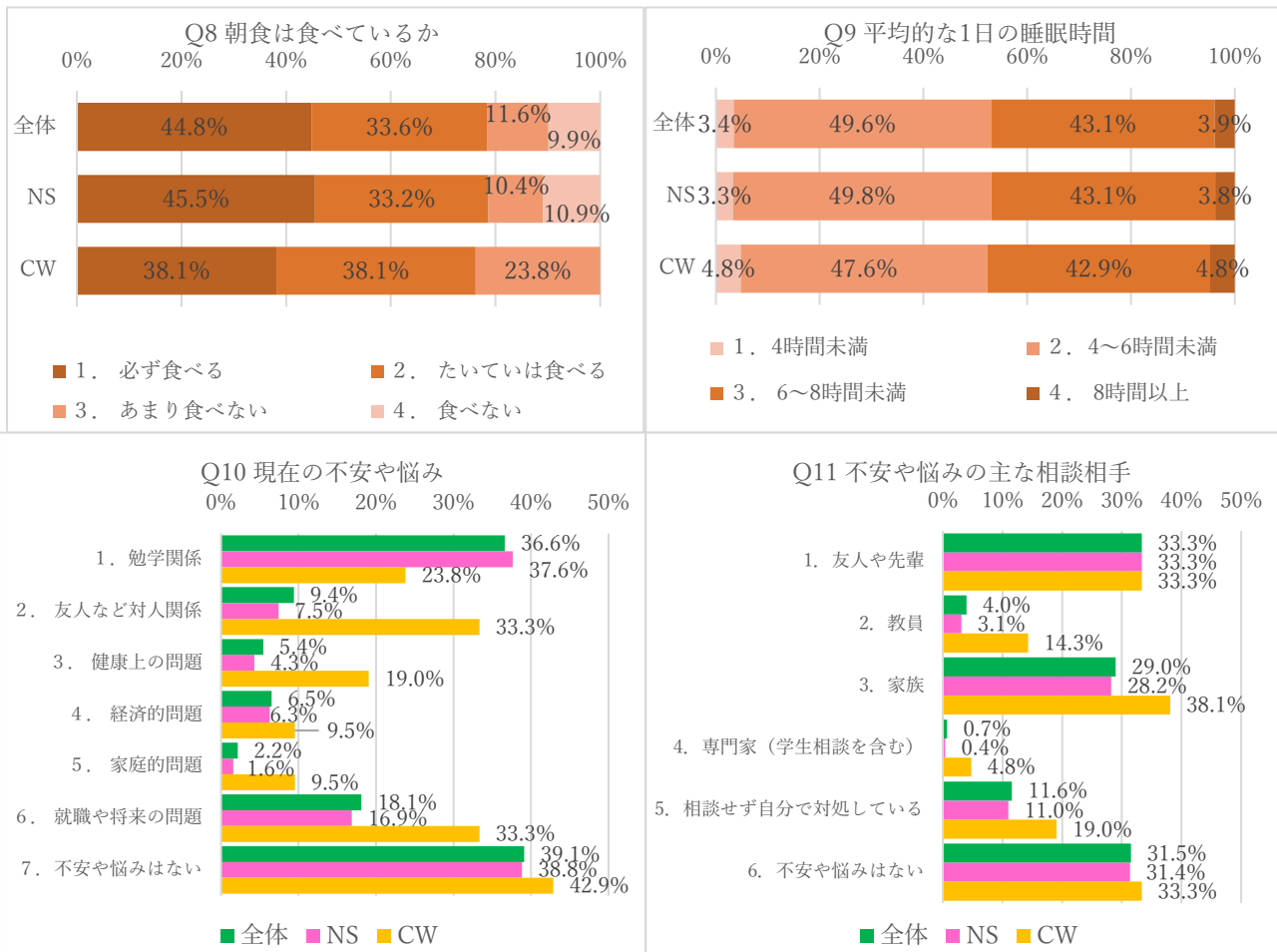
（有効回答者数 NS205～212 CW21）

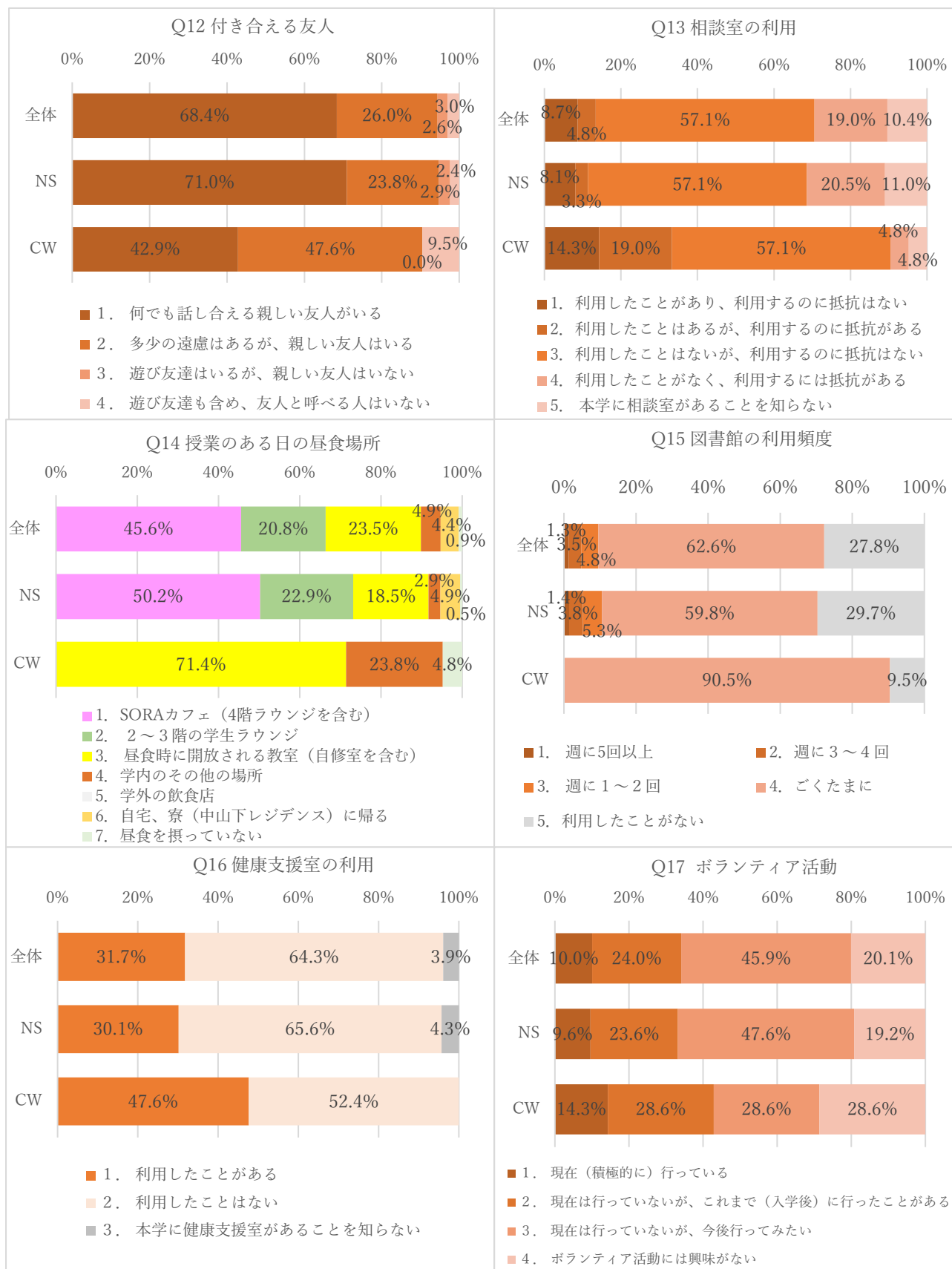


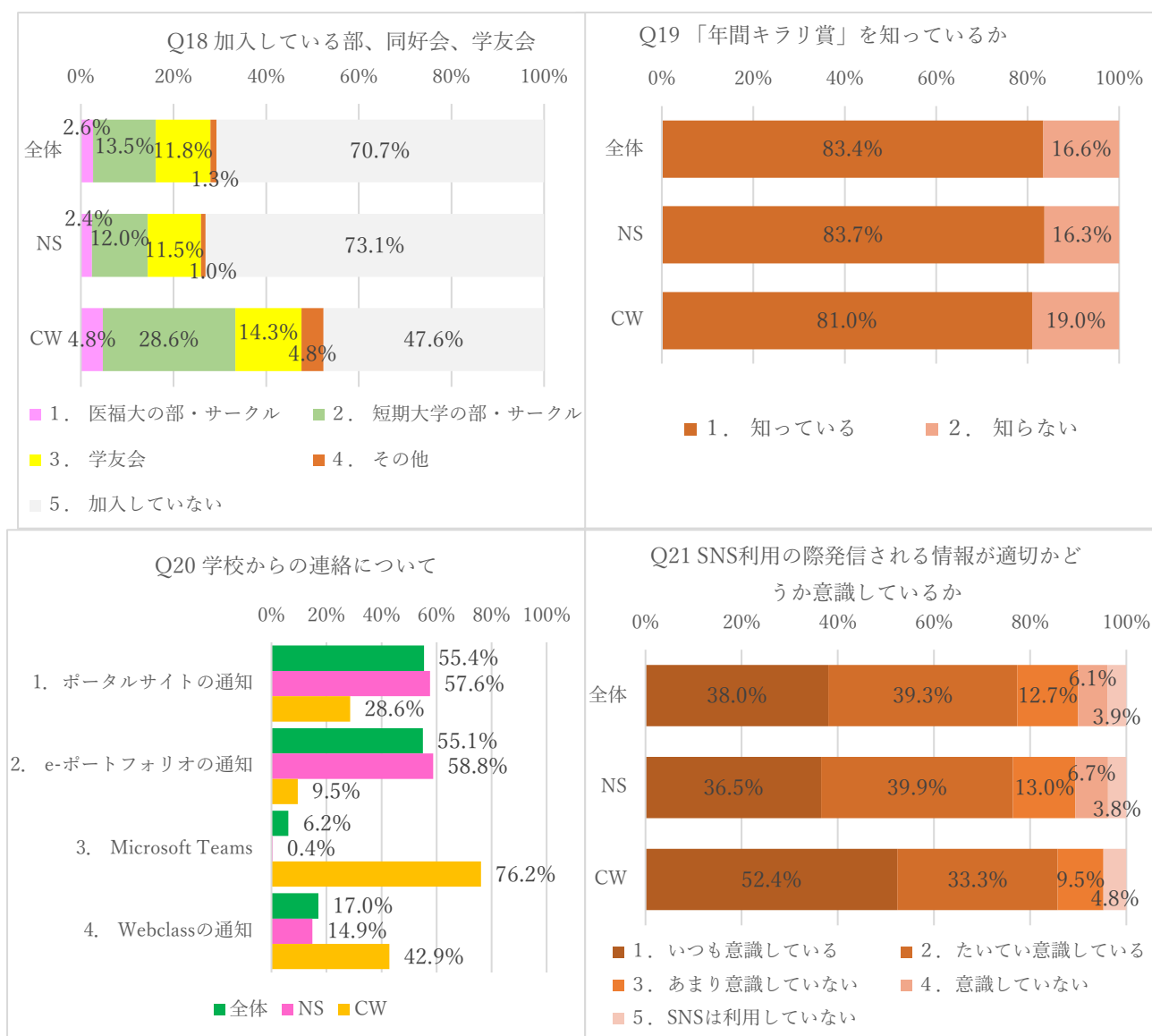


Q7 どのような条件が揃えば学園内病院アルバイトをしたいと思うか。（自由記述） 全 65 件

- ・給料について（高ければなど） 26 件
- ・時間について（アルバイト時間の調整） 10 件
- ・自宅との距離の問題、交通の便 7 件
- ・その他（シフトの都合、服装や髪型の自由度、仕事内容、厳しさなど） 22 件







Ⅲ. 分析まとめと対応

1. 看護学科

自宅から通学する学生が 60.2%と多数を占め、電車通学 46.2%が最多であった。通学時間 1 時間未満が 80.6%と多かった。比較的通学環境は良好であり、多くの学生が無理のない範囲で通学できている。

アルバイト状況については、「週 2 日～4 日」が 56.6%、「娯楽費・交際費」目的が 60.1%、「生活費目的」が 24.0%であった。多くの学生は学費ではなく生活の充実や交際費確保のためにアルバイトをしている。一方で、4 人に 1 人は生活費確保のために働いており、経済的負担を抱える学生層の存在も確認できる。また、「飲食店」44.2%、「病院アルバイト」26.9%という結果から、学生は柔軟な勤務体制や専門性を生かせる職場を選択していることが分かる。今後も奨学金制度の周知や病院・施設アルバイト情報の提供を積極的に行う。

睡眠時間については、半数近くの学生が 6 時間未満の睡眠で生活している。授業の課題やアルバイト、定期試験、臨地実習などが重なることがあり、慢性的な睡眠不足が懸念される。

不安・悩みについては、「勉強関係」37.6%、「就職や将来の問題」16.9%で約65%の学生が何らかの悩みを抱えている。特に2年次生に勉強や将来や就職への不安が突出している。3年次から始まる臨地実習や就職活動・国家試験へのプレッシャーが影響していると考えられる。学習支援制度の充実や国家試験対策支援・就職支援の充実を図ることで学業継続意欲の向上、留年・休学予防、就職不安の軽減を図る必要がある。

友人関係については、「親しい友人がいる」71.0%、「多少遠慮はあるが親しい友人がいる」23.8%であった。94.8%の学生が信頼できる友人を持っており、人間関係は良好である。一方、「親しい友人がいない学生」が5.2%存在するため孤立予防が必要である。

年間行事で学生間や学年間交流ができるようにイベント内容や参加方法を考える必要がある。

相談室の利用については、「利用経験なし」が77.6%、「相談室の存在を知らない」が11.0%、「利用に抵抗あり」が23.8%と認知度・利用率ともに十分とは言えない。特に「知らない」が1割存在することは課題である。オリエンテーションでの周知強化や教員からの利用案内を行うことで、メンタルヘルス不調の予防や早期支援につなげる。

SNS 関連については、大学・教員からの連絡を知る媒体は「e ポートフォリオの通知」58.8%、「ポータルサイトの通知」57.6%、「WebClass の通知」14.9%、「Microsoft Teams」0.4%であった。情報伝達手段が分散しているため学生によって確認媒体が異なるため、重要情報の見落としリスクがある。重要事項の複数媒体配信や情報確認方法の周知が必要である。

SNS 利用の際、発信される情報が適切かどうかの意識については、「いつも意識している・たいてい意識している」76.4%、「あまり意識していない・意識していない」19.8%であった。一定の情報モラルは身につけているが、約5人に1人は十分な意識を持っていない。1年次の SNS リテラシー講座に続く医療従事者としての情報発信教育（実例を活用したケーススタディ）が求められる。

2. 医療介護福祉学科

本学科の学生生活実態調査の回収率は100%であった。

学生の生活状況を見ると、7割が自宅生であり、通学方法は約半数が電車通学であった。通学時間は「1時間未満」が61.8%と多数を占め、大学が駅やバスターミナルに近い立地であることが、自宅通学の多さに影響していると考えられる。

アルバイトについては「週2日～4日」が76.2%と最も多く、目的は「娯楽や交際費」が61.9%であった。一方で「生活費や学費」と回答した学生も約3割おり、学生によって置かれている経済状況が異なることがうかがえた。アルバイトの内容は「川崎学園内病院アルバイト」と「飲食店」がともに28.6%であった。

生活習慣では、朝食を「必ず食べる」「たいてい食べる」学生が76.2%と比較的良好であったが、各学年に1～2人「あまり食べない」学生がいた。睡眠時間は4～8時間未満が大半を占めたものの、2年次生に4時間未満の学生が1人おり、アルバイトや実習、課題負担の影響が考えられる。これらの学生には生活リズムの調整を含めた個別支援が求められる。

現在の不安や悩みについては「不安や悩みはない」が42.9%であった一方、対人関係・将来が各33.3%、勉強23.8%、健康19.0%など、多くの学生が不安を抱えていた。「相談せず自分で対処する」と回答した学生が19.0%いた。自分で状況に向き合い、対処できて

いる点は肯定的に捉えられる。そのうえで、必要な時には相談できる環境を整えておくことが重要である。

友人関係では90%以上が「親しい友人がいる」「多少遠慮はあるが親しい友人がいる」と回答したが、1・2年次生に各1人「友人がいない」と答えた学生がいた。友人関係については個人差があり、一人で過ごすことを好む学生もいる。そのうえで、必要に応じて相談室等へつなげられる体制を整えておくことが望ましいと考える。

SNS 関連では、大学からの情報を Microsoft Teams で入手している学生が76.2%と最も多く、WebClass42.9%、ポータルサイト28.6%と続いた。eポートフォリオの利用は看護学科に比べて極端に少なかった。また、SNS の情報適切性を意識していない学生が1割おり、今後も注意喚起が必要である。

全体を通して、少しずつ学生の生活にも変化が表れている。今後も日常の様子を丁寧に見守りながら、柔軟に対応しつつ学生支援につなげていくことが求められる。

3. 今回の調査の問題点と改善点

本調査により、学生の生活実態や意識の特徴が明らかになった。次年度以降は経年変化を追うため従来の形式に戻すことを学生生活支援委員会で検討しているが、今回の結果から、学生生活や学生の意識の変化に応じて調査内容を見直す重要性を示している。今後のアンケート内容や実施方法の改善を図りつつ調査を継続し、学生支援の検討に生かしていく必要がある。